

愛のムチとして ビンタをくらわした



ベテランの指導者である A さんは、チームの練習を見ていてイライラしていました。大会に向けて少しレベルの高いトレーニング課題を課したのですが、クリアできないプレーヤーが何人もいたからです。しかも、やる気があるのかないのか、どこか投げやりな感じでした。

課題をクリアできないプレーヤーを「何やっているんだ、おまえらは」と大声を上げて集合させると、「こんなこともできないようじゃ、試合に勝てないぞ」と怒鳴りつつ、端から平手でビンタをくらわせました。あまりのことに下を向いて涙をこぼすプレーヤーもいます。

しかし、A さんにすればあくまでも「愛のムチ、であり、自分とプレーヤーたちとの間には信頼関係ができていたと信じていました。また、このやり方で実績を上げてきたという自負もあります。実際、その後の練習ではプレーヤーたちはピリッと引き締まり、前向きに練習に取り組んでいるように見え、やはり「愛のムチ、のおかげだ」と満足したのです。

「愛のムチ」はもう通用しない

パワハラチェック表	評価
①暴行・傷害・脅迫・名誉毀損など刑法に触れるような言動をしていませんか	○
②人格否定や体罰など人間としての尊厳を侵害する言動をしていませんか	(○)
③地位や立場など人間関係の優位性が背景にありますか	(○)
④指導や教育の適正な範囲を超えていませんか	(○)
⑤複数回または執拗ではありませんか	(×)
⑥相手に身体的・精神的苦痛を与えていませんか	(○)
⑦周りのプレーヤーが萎縮するなど、活動環境を悪化させていませんか	(○)
合 計	刑法に触れるレベル (レベルⅣ)

日本では、本ケースのような「愛のムチ」と称してのビンタ（平手打ち）などの暴力・暴言が伴うスポーツ指導を容認する風潮が根強くあります。しかし、スポーツの社会的、教育的影響力の大きさを考えたならば、暴力の容認は絶対にあってはならないことです。社会で認められない暴力が、社会の一部であるスポーツでも許されるはずがありません。

ビンタに限らず、殴る、蹴る、胸ぐらをつかむ、小突くなど、人の身体に対して有形力を行使した場合には、プレーヤーがケガをしていなくても、刑法の定める暴行罪が成立します。ケガをしていれば傷害罪などが成立することも考えられます。これまで「愛のムチ」でチームを強くしてきた経験がそうさせるのですが、暴力はあくまでも暴力であり、本ケースはパワハラチェック表で見ても、①の「刑法に触れるような言動」で一発レッドカードとも言えるレベルⅣに該当します。

暴力行為は、スポーツの価値を著しく冒瀆するものです。チームを本当に強くしたいのであれば、**チームやプレーヤー個々人に明確な目標・課題を設定し、できないときには言葉での説明や手本を示す、さらには理解を助けるためのツールを活用するなどして、どこが足りないか、どうすればよいかを本人に気づかせ、励ましていくなどしていきましょう。**